

【臨床・研究】

膀胱癌における術前膀胱パンチ生検の臨床的意義

みつ い よう ぞう しい な ひろ あき
三 井 要 造^{1,2)} 椎 名 浩 昭¹⁾

キーワード：膀胱癌，膀胱鏡，パンチ生検，経尿道的膀胱腫瘍切除術

要 旨

膀胱癌における術前膀胱パンチ生検の臨床的意義を検討した。対象は1996年1月～2013年3月の間に、経尿道的膀胱腫瘍切除術（TURBT）を施行した筋層非浸潤性膀胱癌で、外来で術前膀胱パンチ生検を実施した385例。生検標本とTURBT標本との病理組織学的相関と、膀胱パンチ生検に伴う合併症を評価した。生検標本による癌診断率とTURBT標本との一致率は、それぞれ95.1%と61.8%であった。TURBT標本との一致率は腫瘍の組織学的異型度が強くなるにつれ低下し、多発性腫瘍では単発性腫瘍より過小評価しやすい傾向が見られた（ $P=0.058$ ）。処置を要する合併症を5例（1.3%）経験したが、全例が生検後の血尿に起因するものであった。術前膀胱パンチ生検は安全に施行可能で、膀胱腫瘍異型度の術前診断に有用と思われた。一方、複数または高悪性度の腫瘍では過小評価になりやすい点に留意が必要である。

緒 言

膀胱鏡下に行う膀胱パンチ生検は局所麻酔下に外来で施行可能であり、膀胱癌の診断や経過観察において有用な検査の一つであると考えられている^{1,2)}。島根大学医学部泌尿器科では膀胱鏡検査で腫瘍や粘膜異常を認める場合、原則全例に術前膀胱パンチ生検を施行し、得られた病理組織診断を基に経尿道的膀胱腫瘍切除術（TURBT）を計画

している。今回われわれはTURBTを施行した筋層非浸潤性膀胱癌症例を後法的に検討し、術前膀胱パンチ生検の安全性と臨床的意義について検討した。

対 象 と 方 法

対象は1996年1月から2013年3月までの17年間に、島根大学医学部泌尿器科でTURBT前に外来で膀胱パンチ生検を実施した筋層非浸潤性膀胱癌385例。膀胱パンチ生検はキシロカインゼリーによる粘膜麻酔の後、専用鉗子を用いて硬性または軟性膀胱鏡下に行った。検査後は抗生剤と止血剤を経口投与した。全例検査前十分にインフォー

Yozo MITSUI et al.

- 1) 島根大学医学部附属病院泌尿器科学教室
- 2) 東邦大学医療センター大森病院泌尿器科（H28.4.1より）
連絡先：〒143-8541 東京都大田区大森西6丁目11-1
東邦大学医療センター大森病院泌尿器科